

## 入学初期の学修状況と経年後の成績（報告）

近藤 伸彦 (Nobuhiko KONDO)

CELL 教育研究所 (CELL Institute for Educational Development)

### 1. はじめに

高等教育のユニバーサル化が本格化したことや、加速するグローバル化などの社会的変化により、従来の大学教育は変革を余儀なくされている。大手前大学（以下、「本学」という。）も例外ではなく、多様化する学生それぞれに対して意味のある教育をいかに構築するかが切実な問題となっている。

このような状況の中で、本学は「リベラルアーツ型教育」をキーワードとした大学改革を遂行してきた。とくに導入教育や初年次教育については、主体的な学修力を育成するための起点として学士課程の中に位置づけ、さまざまな取り組みを実施してきた。しかしこれまで、そうした入学初期における取り組みが、学士課程の中でどのように機能しているかという視点での分析は十分に行われてこなかった。学士課程全体にわたる一貫した教育を推進するためには、こうした検証を行う必要がある。

そこで本稿では、とくに学修状況に関する学士課程を通じた知見を得ることを目的とし、入学前教育や初年次教育における学修状況と経年後の成績との関係について考察する。

### 2. 学士課程教育

#### 2.1. 学士課程と質保証

中央教育審議会（以下、「中教審」という。）やかかつての大学審議会による各種答申によると、それぞれの大学はその理念に基づいて学士課程教育を組織的に構築し、改善しながら提供していくことが求められている。とくに「学士課程答申」（中教審 2008）では、学士として保証する能力を明確にしたうえで入口から出口への一貫した学士課程を構築することを提言している。

これらを踏まえ、本学においても教育の質保証についての議論がなされた。この議論を経て、本学の卒業生は学士課程を通して専門性と社会人基礎力を統合し、広く一般から認められる「就業力」を身に付けるものとし、この質保証の実現に向けて全学的に取り組むことを宣言した。現在は、学修成果を評価するための基準や方法の策定、学修成果を可視化する IT システムの整備などに着

手している。

また、2012年3月の中教審審議まとめ「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」（中教審 2012）において、授業時間外での主体的な学修時間の増加や学修成果の把握の必要性が謳われていることから、いままさに学修の過程や成果の評価・可視化が求められているといえる。

#### 2.2. 入学前教育・初年次教育と学士課程

本学は2007年度の学部改組を機に、リベラルアーツ型教育に必要な仕組みとして、「3学部クロスオーバー」「ユニット自由選択制」など、学部を超えた履修を可能とする制度を導入し、これに基づいて教育改革を推進してきた。その中で本学はとくに、リベラルアーツ型教育の起点として初年次教育の重要性に着目し、注力してきた。リベラルアーツ型教育においては、大学での学びに必要なアカデミックスキル等の習得はもちろん、学生が主体的に目標設定することにより自らの学びに責任を持つ仕組みを作ることが重要である。本学は、このような観点から、PDCAサイクルに則った継続的な主体的学修ができるようになる教育システムの構築を目指し、全学的、組織的に初年次教育を実践してきた。必修科目としては、全学部共通で「フレッシュマンセミナー」「日本語表現」「英語表現」「情報活用」の4科目を初年次の春学期・秋学期にそれぞれ配置した<sup>1</sup>。

さらに本学は、入学決定者に対する入学前教育を2009年度より全学的に実施してきた。入学前教育では、大学での学びのウォーミングアップとなる課題や、入学後に使用する Web システムの体験などにより、学生を初年次教育へスムーズに接続することをねらった。入学生の課題提出状況は、学生情報として入学後の授業担当教員へ提示したほか、学修意欲の面で支援の必要な学生を早い段階で見つけ出すことにも活用した。

このように、本学はこれまで、入学前教育や初年次教育を学士課程の入口として重視してきた。一貫した学士課程を構築するという観点をふまえると、これらの教育プログラムにおける学修状況がその後の学士課程での学

<sup>1</sup> 2011年度以降は「キャリアデザイン」「英語」「情報活用」の3科目

修成果とどのような関係をもっているのか検証する必要がある。

### 3. 学修状況と学修成果

本稿では、入学前教育や初年次教育における学修状況と、学年進行を経たあとの成績との関係を調べる。これにより、学士課程初期の学修状況と経年後の学修成果との関係を考察する。

#### 3.1. 学修成果の指標

##### 3.1.1. GPA

本稿では、学修成果を示すひとつの指標として、GPA(Grade Point Average)からアプローチする。本学における成績評価は表 1 のとおりである(大手前大学 2012)<sup>2</sup>。GPAの値は履修科目のGP(Grade Point)と単位数との加重平均と定義され、0 から 4 の間の値をとる。本学では、卒業要件のひとつとして入学時からの通算 GPAが 1.5 以上であることを定めているなど、GPAを質保証のツールとして実質化させている。

本学は、ひとつの年度を春学期と秋学期の 2 学期に分けたセメスター制を導入している。これにともない、適時的な履修指導を行うために学期ごとの GPA が算出される。入学時から直近の学期までの通算 GPA もひとつの指標であるが、通算 GPA は学期を経るにつれ履修単位数の累計が大きくなるため、値が変化しにくくなる。

表 1 大手前大学における成績評価と GP

評語	意味	GP
A	特に優秀な成績	4
B	優れた成績	3
C	一応その科目の要求を満たす成績	2
D	単位が与えられる最低の成績	1
F	不合格	0

##### 3.1.2. 成績パターンの分類

学修状況と成績との関係を分析するにあたり、GPA の値の範囲を以下のとおり 3 つのパターンに分類する。

- ・高：GPA3.0 以上
- ・中：GPA1.5 以上 3.0 未満
- ・低：GPA1.5 未満

GPA3.0 以上は平均して「B (優れた成績)」以上の成績を得ていることに相当するため、GPA が「高」とみなす。GPA1.5 未満を「低」とみなすのは、本学の卒業

要件のひとつが「通算 GPA1.5 以上」であることを根拠とする。すなわち GPA が 1.5 未満であることは、そのままでは卒業できない状態であることを意味する。

#### 3.2. 学修状況の指標

学修状況を示すものとして、次の3種類の指標を考える。

##### (1) 入学前教育課題提出率

2009年度、2010年度の入学前教育においては、「日本語表現」「英語表現」「情報活用」の3科目について全4回、計12回の課題を課し、携帯電話対応型LMSを通じて提出させた。この12回の課題の提出率を1つめの指標とし、次の3群に分類する。

- ・全提出 : 12回すべての課題を提出している
- ・一部提出 : 提出回数が1回以上12回未満である
- ・無提出 : 1回も提出していない

##### (2) 1年次必修科目春学期出席率 (4科目平均)

春学期全15回の出席率を、1年次必修4科目(科目名は2.2に記述)について平均したものを2つめの指標とし、次の3群に分類する。

- ・95%以上 (ほとんど出席)
- ・80%以上95%未満 (やや欠席しがち)
- ・80%未満 (欠席しがち (平均1科目4回以上))

##### (3) 1年次末通算GPA

前節ではGPAを学修成果の指標とみなしたが、ここでは、学士課程におけるある時点での通算GPAを、その時点での学修状況の一種であるとみなす。1年次末の通算GPAを3つめの指標とし、3.1.2と同様の定義で、「高」「中」「低」の3群に分類する。

## 4. 分析結果

本稿では、3.2で示した学修状況に関する3種類の指標と、学修成果の指標としてのGPAとの関係を調べた。

分析対象は、2009年度および2010年度入学生とした。ただし、2、3年次から編入した者、休学または海外留学した期間のある者、および2012年5月1日の時点で学籍を失っている者は分析対象から除いた。また、入試時期の違いにより、入学前教育の課題への取り組み期間が異なる学生についても分析対象から除いた。その結果、「入学前教育課題提出率」については2009年度生557人、2010年度生650人、「1年次必修科目春学期出席率」と「1年次末通算GPA」については2009年度生634人、2010年度生699人が分析対象となっている。

学修成果の指標としてのGPAには、2009年度生については3年次の秋学期GPAを、2010年度生については2年次の秋学期GPAをそれぞれ用いた。

<sup>2</sup> GPA 対象となる評語のみ抜粋

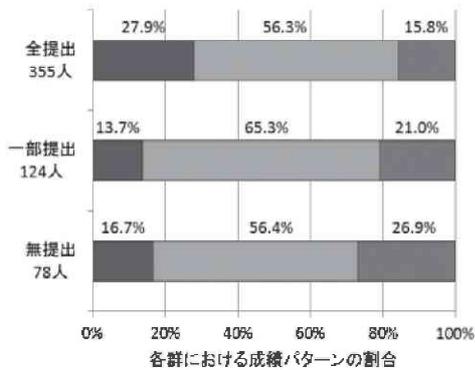


図 1 入学前課題提出率と 3 年次秋学期 GPA (2009 年度生、対象 557 人)

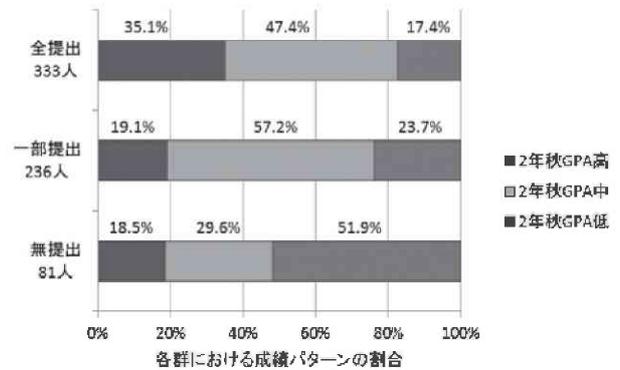


図 2 入学前課題提出率と 2 年次秋学期 GPA (2010 年度生、対象 650 人)

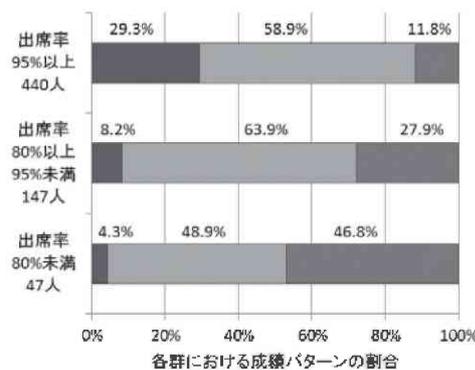


図 3 1 年次必修 4 科目出席率 (春学期) と 3 年次秋学期 GPA (2009 年度生、対象 634 人)

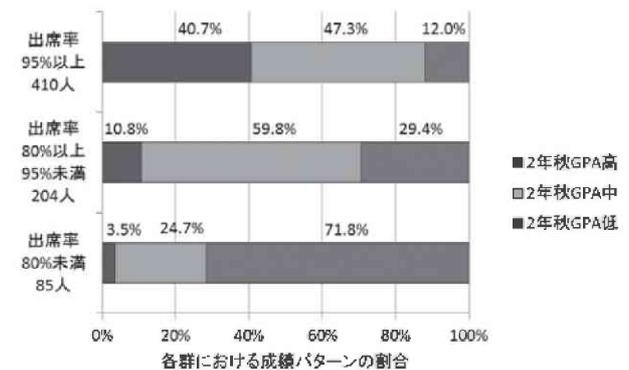


図 4 1 年次必修 4 科目出席率 (春学期) と 2 年次秋学期 GPA (2010 年度生、対象 699 人)

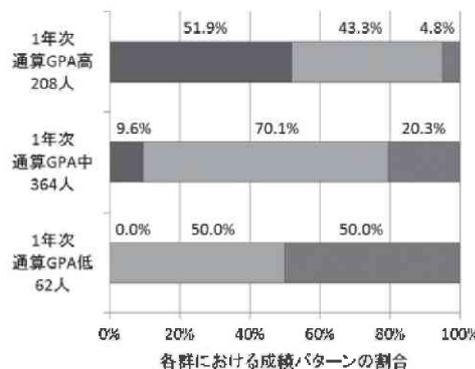


図 5 1 年次未通算 GPA と 3 年次秋学期 GPA (2009 年度生、対象 634 人)

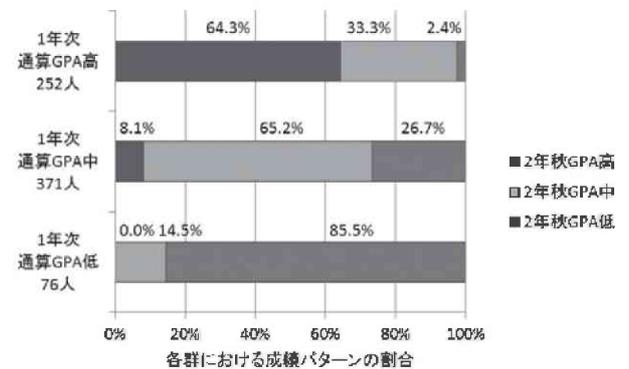


図 6 1 年次未通算 GPA と 2 年次秋学期 GPA (2010 年度生、対象 699 人)

図1～6は、学修状況の指標に基づき分類された各学生群について、成績パターン（「高」「中」「低」）の分布を示したものである。いずれの図からも、学修状況が良いほど成績が高い学生の割合も高くなっていることがわかる。図5、6からわかるように、その傾向は「1年次末通算GPA」において最も顕著である。これは、1年次全体の学修状況がそのまま学士課程全体の学修状況に結びつきがちであることを示している。

「1年次末通算GPA」ほどの強い傾向はないが、「入学前教育課題提出率」および「1年次必修科目春学期出席率」も同様の傾向がある。この結果は、1年次の春学期あるいは入学前の時点で、学修に関する学生の特質を推定できる可能性を示唆している。ただし、これらの指標は単に「提出したか否か」「出席したか否か」という量的な指標である。課題の内容や出席態度などの質的なデータを含めて分析すれば、学修に関する学生の特質、指向性をモデル化できる可能性があると考えられる。

## 5. おわりに

本稿における分析結果から、入学前から初年次の1年あまりに関する学修状況が良好なほど、経年後の学修成果も良好である傾向がみられることが明らかになった。また、現在著者らにより学修状況と休退学との関係も分析中であり、同様の傾向がみられることが示されつつある。すなわち、「課題提出や出席ができない」という学修に対する不適応性は、それ以降の学士課程における学修に大きく関与する可能性が高い。こうしたデータを有効に活用すれば、入学前や初年次の初期の段階からそうした学生を発見し、支援の方法を探ることも可能になるといえる。

2012年度より、本学ではLMS<sup>3</sup>上で出席状況を管理することが可能となり、必修科目と1年次の全科目において出席状況の登録を行うこととした。今後は本学の全授業科目において出席管理を行う予定である。今後の課題としては、(1)入学初期の学修状況に関して分類された学生群のそれぞれについて、学修状況や学修成果がどのように経年変化していくか分析する、(2)全授業科目の出席状況のデータを活用し、学生個別の詳細な出席パターンを分析する、(3)出席状況のデータを他の学修状況等のデータと合わせて分析することにより、学生の特質に関する数理モデルを構築する、といったことが挙げられる。

## 参考文献

- 絹川正吉 (2008) 『大学教育の思想』 東信堂, 東京.  
 大手前大学 (2012) 『STUDENT HANDBOOK 2012』 大手前大学, 兵庫.  
 中央教育審議会大学分科会大学教育部会 (2012) 予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ (審議まとめ), 中央教育審議会.

<sup>3</sup> Learning Management System の略。本学においては、独自開発の“el-Campus”を活用している。